

---

# 自己中心的なことは7つの大罪の根源たりうると思われる件

あるちゅん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自己中心的なことは7つの大罪の根源たりうると思われる件

### 【コード】

N6923U

### 【作者名】

あるちゅん

### 【あらすじ】

境練次は神になりたかった。田村幸一は清廉でありたかった。吉田恵一は誰かに優しく欲しかった。3人それぞれ、考えているのは自分のことだけだった。

1 「境練次の愉快」(前書き)

グロイかもです。注意

## 1 「境練次の愉快」

床にへたり込んだ男が怯えている。男は屈強な体格をした、街にあつては肩をいからせて幅をとつて歩くことを許可された人間に見える。その男に田村幸一が近づいていく。すると男は女みたいな声を上げて腰を浮かせ、僕の方へ擦り寄ってくる。

「た、たた、たす、助けてくれえ。頼む。いや、頼みます。お願いします。」

そう叫び、僕に向かって土下座をする。礼、などという生易しいものではない、人生すべてを悔み贖罪する羊が神の御前でするほどに畏れ、怯え、情けなくガキのように泣き伏せ、ひたすら床に額をこすりつけ、この僕に、この境練次に頭を垂れている。

男の後を追つて、田村さんが背後に立つ。まあ、とはいえ、こいつの背中は天井を向いているから、正確には尻の後ろか。くっつぶふ。田村さんが、何か問うように僕を見てくる。どう殺るのか、を聞いているのだらう。僕は平伏する男の頭をそつとなでて、出来るだけ優しい声で言う。

「右足・右手・左足・左手・最後に首をゆつくりちぎってあげて下さい。途中で死なないように優しく、ね。」

「ぐ、ぐぎゃあああああつあああ、ああああ、足がああ足、あしがつああ」

おつきなペンチで握り潰されたように、男の右足の付け根が潰れて本体と別れ別れになっている。蛙みたいに跳ね起きて、千切れた足を見て泣き喚く。

暗い愉悦が僕の心に溢れる。こんなに残酷な気持ちになるのは久しぶりだ、昔つがいのトンボを捕まえて、二匹一緒に踏み潰したことを思い出す。虫をライターで燃やしたことを思い出す。ウシガエルを焼却炉に放り込んだときのことを思い出す。残酷な心が止まらない。どうやら血に酔ったみたいだ。そういえば、辺りは呆れるほ

ど血まみれだ。何人くらい殺つたんだろう。初めから数えてなかったからわからないや。今から数えるにも、みんなバラバラだからなあ。テーブルに置かれた灰皿が血で一杯になっている。こりゃあ酷いや、ふふふ。

ブチブチブチブチブチツ

すごい音がして振り返ると、僕の愛して止まぬ殺戮者が、さっきの人間に最後の變形を施しているところだった。うふふ。すごい音するんだ。宙に浮いたダルマさんが、上と下からすごい力で引っ張られたように首が伸ばされてリコーダーくらいの太さになっている。

グバシャツツ

となつて、鮮血が噴出す。へええ人間の血つてたくさんあるもんなんだ。

ゆらりと立ち上がって、愛しの田村氏は僕を見る。

「うん、オツケーです。何度見てもすごいですねえ。僕にも使えればいいのに、それ。まあ、いいか。貴方がいるし。さあて、後は貰うもん貰って退散しましょう。」

田村さんは僕の求愛スルー。まあいいけど、応えられても気持ち悪いしね。

## 1 「境練次の愉快」(後書き)

どうでしょうか。書いてるうちにドンドン過激になっていった気がします。

## 2 「吉田圭一の不運」(前書き)

場面がガラッと変わります。

## 2 「吉田圭一の不運」

しくった。あんの野郎。あんなよええくせに、ヤのつくご職業とは……

「こら、てめえ、待てコラア。おい、そっち行つたぞ。」

「ちよつとお、お兄ちゃんねえ。おじさんたちやオニごっこしてえわけじゃねえんだよお。ちよつとお話してえってだけなんだなあ。」  
昔俺のママンは言つてた、物腰の柔らかいヤクザは本当にやばいつて。捕まつたらコンクリ東京湾に違いねえ。

俺は吉田恵一。人畜無害な一般市民。人に何かを与えたり、与えますよと告知し、その対価にお金を頂くという。これ以上ない普通のサービス業を生業としている。昨日の客は相手が悪かった。弱そうなおつさんだったんだが、どうやらいま俺を欲してやまない、まるやさんの下っ端だったみたいだ。資金運びの最中だったようで、たくさんのお金を持っていらつしやった。そこで俺、張り切つちやつたんだよね。張り切つてたくさんサービスしたの。そのあまりのサービスにおつさんが昇天して、いくらでも持つていいとおつしやたので、全部頂いたのさ。300万。いやあ、いい仕事したなあつて、うわ！

「っち、待てコラア！金返せ、テメエ」

あつぶねー、あんな腕につかまえられたら、恵一困つちゃう。返せるもんなら返してますよ。いやあ、パチンコ、寿司、キャバクラ、風俗。昨日の晩は俺の人生で一番ハツスルだったぜ。まあ、その対価が300万だったというだけだ。今は、その対価に命が上乘せられないよう、命を燃やして走っている。人生つて矛盾に満ちてるよなあ。

駅の改札に逃げ込む。切符なんて要らないぜ！Suicaの発明者に俺は人生最大の「ありがとう」を贈る。これで大丈夫と、振り返る……あらあ？

「お前、こついうとこにめえわくかけたらあかんのぞ、コラ。」  
ゆっくり引きつった顔で、俺に近づいてくるおっちゃん。その手には、Suica。

「す、Suicaなんてつくりやがってええええっええ！」

ダッシュで逃げる。幸い、公衆の面前で自分が迫力を発揮した際の社会に対する影響を熟知していたそのおっちゃんの動きは鈍かったが、しかし改札口には血気盛んな若武者が大勢待機していらっしやった。伏兵にすれば、容易に余を討ち果たせたとあるうに、諸葛亮・周瑜も噂ほどではない、と赤壁の後に嘯く曹操の台詞が幼い頃読んだ横山光輝の絵で浮かぶ。まさかこれは走馬灯。俺、死んじゃうのかな。ああ、昨日の女、あと一発やっておけばよかった。あるいは、もう一貫あの大ト口を。

『まもなく1番線に電車が参ります。白線の・・・』

という放送で頭の中の曹操は消える。死に物狂いでホームへの階段を駆け上がる。尋常じゃない雰囲気は既に駅公舎に満ちていたので、最早早期解決の方が良作と判断したおっちゃんも普通に駆けってくる。やばい。やばい。やばいやばいですよ。その顔やばいですって。鬼、鬼じゃん。こ、殺されてまう。

駆け上がったホーム。左右を確認。電車が見えた。大丈夫タイミング的にオツケー。早く、早く来てくれえ！電車が来るのと同じ向きに走る。電車の最後尾が視認できた辺りでおっちゃんが階段を登り終えて、こちらへ来る。くそっ、早いし速い。おっちゃんはぬるぬる速歩きで追ってくる。張り付いた笑顔が怖すぎる。大魔神か、貴様。ホームの最後まで着いたとき、おっちゃんはもうはちきれそうな笑顔で、電車はようやく先頭車両がホームへ入ったところだった。俺はホームの隅へ逃げる。もうだめだ。このままではケチャケチャにされる。やるしかない。俺は魂のダッシュを発動した。

「はあはあ・・・」

やった。やったぞ。俺は一番線のホームに立っていた。二番線のホ

ホームに立つおっちゃんとは今や線路二本電車一台分隔られている。俺は電車に乗り込んで、窓からおっちゃんが大慌てで階段に向かうのを大笑いして見ていた。動物園やサファリパークには行ったことがないが、今度言ってみよう。なんて楽しいんだ。そんな時

『急停止申し訳ありません。しばらくお待ちください。安全の確認をするまで、しばしお待ちください。』

と車掌の放送がある。なに止まってんだよ。こちらら急いでんだぞ、人の迷惑考えろや、とまで思って、駅員が近づいてくるのを見て青ざめる。そーですよねえ。目の前人が通ったら止まりますよねえ。

そんで事情聴くまで出発しませんよねえ。こういう体制が鉄道安全神話の根源ですよ。というわけで、二度目の魂のダッシュ発動。

車両を出て、車両の前に空いたホームの余地から飛び降り、線路に沿って駆け出した。頭の中は「Stand by me」サビ部分の無限リピートでいっぱいになった。後ろからおっちゃんの怒号と宥める駅員との問答が聞こえる。俺は、5、6年かな、まあそんならい世話になった汚い街に「さようなら、ありがとう」を言いながら、魂のダッシュを発動し続けた。

程なく、線路から降りる。大きめの通りまで出て、タクシーを探しながら繁華街に背を向けてひたすら走る。ようやく一台のタクシーを見つけて、手を挙げる。これで、なんとかなった。とりあえず何年か前に別れた女んとこへ転がり込むか。まだ教師を続けてくれるといいなあ、教え子に手えだしたネタがまだ効くといいんだけど。そんなことを思いつつ、開いたタクシーのドアに滑り込もうとすると、先客いるじゃん。なに停まってんの？って運転士をねめつける前に腕をつかまれた。

「面倒かけてくれたのお。お兄さん。」

俺の手をつかんだ強持ての兄さんの奥から、白スーツのお方がご挨拶。・・・畜生。

## 2 「吉田圭一の不運」(後書き)

如何でしょうか。次回は境少年たちと吉田が合流します。

### 3 「田村幸一の葛藤」(前書き)

反応ないなあ・・・つまんないかな・・・やっぱり第一話が酷すぎたかな？

### 3 「田村幸一の葛藤」

「貰うもん貰って退散しましょう。」

境くんはさも愉快そうな笑顔で言う。この惨状に本気で愉悦を感じているようだ。何もかもが血まみれで、何もかもが赤黒く、何もかもが鉄臭く、私自身は吐き気を感じる。今更、と思う。この惨状を自ら作り上げておいて、何を言うと、心の奥の私が私を責める。わかってる。でも吐き気がする。そんな自分に安心する。まだ狂ってない。それだけでいい。

背後から、人間の気配を感じる。青年に告げねばならない。

「誰かが来ます。」

青年に話しかけるときは、出来るだけ抑揚なく、棒読みになるように話す。この青年への贖罪を忘れていないと宣言するために。私がここに、贖罪のために存在することを、私自身に宣言するために。「ふうん。長居しすぎたかな。まあひよっとして警察かもしれないが、瞬殺しといてください。金目のもんは僕が集めますんで。」境くんは奥へ行ってしまう。奥にもう人間がいないことだけ確認して扉に意識を向ける。まもなく、何者かが来る。

扉が開き、そこから男が顔を出した。白いスーツを着た、中年の男性。一瞬で顔をゆがめ、躊躇しながら中に入ってくる。その後ろから、自分と思しき、若目の男性が入ってくる。気配からすると、とりあえず運の悪い闖入者はこの二人だけのようだ。部屋の壁に寄りかかった私に気づかず二人は中へ進む。致し方ないことだ。これだけの虐殺現場、目にしたことのある日本人はヤクザでもそうそういまい。どうしてもセンサーショナルな死体に目がいく。その上私は頭からつま先まで血糊でべっとりぬれて、この壁と同じ彩になっている。擬態というやつですね。闖入者の首を平べったい大きな刃物が切断するイメージをする。すると、音もなく二人の男性の頭と胴体は離れ離れになり、胴体から血がほとばしる。重力と関節の加

減に従って、ふにや、ふにやと崩れる胴体を見る。心の中に不愉快を探し、それが見つかってほっとする。ああ良かった。私はまともだ。それならいい。そうでありさえすれば。

また、扉の方に気配を感じる。男性が一人、扉を開けて入ってきた。今度は警戒してなかなか入ってこない。部屋に入り込まれてすぐソファの陰に隠れられてしまったので困ったが、相手の体が大きかったのが幸いし、少し尻の部分がはみ出していた。その部分をきれいにそぎ落とすイメージをしたところ、悲鳴を上げて飛び上がったので、後の作業は簡単だった。最後の闖入者始末したところ、背後の窓に人の気配を感じた。誰か見ている。だが、今は窓から顔を出さない。窓をじっと見るが、どうにも顔を出さない。私の能力は人にしか通じない。私の能力はイメージ通りにあらゆることを実現する。しかし目に見えぬ人間に能力を行使するのは苦手だった。どうにもうまくイメージできない。今もどうにか壁の向こうにいるこの人物を真つ二つにしようとしているのだが、能力発動に至るほどイメージが固まらない。

「おお、やりましたねえ。良かった。警察じゃないですね。こっちは片付きました。帰りましょう。」

窓の向こうにはまだ気配がある。この男、この事務所に属すなら者なら、今の男と同様に入り口から来たはずだ。窓から眺めている以上、第三者かもしれない。このような無関係のものをどうするかを境くんを取り決めてない。殺さない。私には殺せない。人殺しはいけないことだ。私にはその常識が息づいている。人を殺すようなことは出来るだけ避けるベクトルを私は備えている。そうだ、私はまともだ。

「うわっ」

「大人しくしててね、ぼつちゃん。悪いようにはしないからさ。」窓の外の気配はいつの間にか入り口の扉の裏側に移動していた。思考に没頭しすぎた。気配は境くんを捕らえ、こちらに姿を見せない。私の能力は観察されてしまったのかもしれない。どうする。境くん

に死なねたら、私は私は・・・どっなくなってしまっただろっ。

3 「田村幸一の葛藤」(後書き)

次回から後半です。

#### 4 「境練次の憤怒と強欲」

畜生……こんなことつて。何者だ、こいつ。

「あんた、誰？僕らに歯向かうとろくなことにならないって、部屋の中見たらわかるでよね。さつさと放した方がいい。」

「はあん？そうはいかないんだなあ、ぼっちゃん。僕ちゃんなんとなくネタはわかつちやっつてんだよね。見られなきゃいいんでないかい？」

こいつ……田村の力に気づいてる。どうする、なんとかこいつを田村の前に引きずり出さねば。

「ふへへっはは。一卷の終わりどころか、こんなおいしいことになるとは、ね！」

僕の懐から今そこから奪ってきた金やら麻薬やらを奪い取って、これ以上ないご満悦の顔をする。僕の持ち物に手を出すか……こいつは、殺す。なにがあっても、こいつだけは殺す。

「返せ！」

「返せえ？盗品じゃねえか？偉そうに言ってるじゃねえよ、坊主。

それより、おい。なにあの化け物。お前のペット？」

「……」

意地でも言つものか。早く何とか手を……

ドゴオ

「ぐう」

倒れ伏し凄まじい痛み of 根源を探って、腹を殴られたと悟る。胃液が逆流してひとしきり吐き続ける。

おごおううう。ぐええええええええ。

畜生、じくじよう。僕が、神にも等しい僕が、こんな目に……こいつ、こいつ……

「ぐえ」

倒れ伏したところ、さらに頭を踏まれる。



「そつか。どうしてもだめ？僕ちゃん欲しいなあ、その力。」

「無理です。」

パンッ

僕から奪った拳銃で、男は田村を撃った。数分振りに対面した田村さんは胸を打ちぬかれて仰向けに倒れていた。

「ーら、らんれうつら。らんれ！《な、なんでうつた。なんで！》」  
僕の殺戮者が！僕の玩具が！僕の！僕だけの、僕だけの人殺しが！  
これから！これからだったのに。これからすべてをてにいれるはず  
だった。金も、権力も、人脈も、神にもなれるはずだったのに。神、  
僕が神に、神にいいい。

「ぐおおおおおおおおお」

僕の、僕の神への道、すべてを手にする道を・・・

「ふふ、ふへへへ。へへへへへ。吉田恵一様のものにならねえなら  
死んじやいなよ。」

## 5 「吉田恵一の嫉妬」

あゝあ、撃っちまった。なんだろうな、急に撃ちたくてたまんなくなっちまったのさ。

少年から奪った袋を見る。ざっと数えても300万どころではない大金、うまく捌けば現金以上に価値がありそうなヤク、ちらほら見える指輪には見たことねえ宝石がくつついてる。あんなガキがな。あんな化け物を飼えて、こんなすんげえ大金ゲットして。ふざけんな。世の中そんなに甘くねえんだよ、くそガキが。

俺の家は普通の家庭だった。普通の父親、普通の母親。でも、弟が悪かった。トンビがタカ産んだ。弟を表現する両親や親戚の賞賛で覚えた力慣用句だ。俺は昔から出来が悪かった。悪いことに、両親より出来が悪かった。両親の期待が弟だけに注がれていることは明らかだった。両親は出来の悪い俺に同情して、なにかと世話を焼いて、いい親を気取っていた。弟も両親の期待を鼻にかけて、余裕ぶって俺に気を遣いやがった。どいつもこいつも俺を馬鹿にして、下に見て、なめてやがった。大学を中退して、あの街に住み着いてからは、泥水するような生活だったが、それでも親も弟もいない生活は素晴らしかった。誰ももう俺を馬鹿にしない。

目の前で、死に掛けの化け物に取りすがって泣く坊主には弟と同じ匂いがしやがる。何でも持つてくるくせに、それに気づきもしないで、自分が偉いみてえに人を馬鹿にして、仏か菩薩気取りで憐憫たれてきやがる。

「はむらあ！ひぬな！ぼくの、おくのそひゅうぶつがはつてに、ひぬなんて、ゆるははいぞ、ひつはまあああ」

坊主の舌はなんかの拍子に千切れたらしい。歯のなくなった爺みたいな滑舌で惨めったらしい背中にさらにムカつくのを感じる。なに、

執着してんだよ。なくて当たり前なんだよ、そんな化たからものけ物。あつて  
当たり前とか思ってたんじゃないよ、クス野郎が。なんとなく、ガキ  
の背に銃を向ける。こいつをもう見ていたくねえ。

## 6 「田村幸一の高慢と怠惰」

私は、あの時、どうかしてただけなのだ。能力に目覚めたあの日。私は昂奮を抑えられず、通りすがった民家の夫婦に、その能力を振るいたくなくなって仕方なくなった。きれいな奥さんだった。あの人がばらばらになったら、いま、にこやかに微笑む旦那さんはどんな顔をするだろう。確かそんなことを考えてしまったことは覚えている。後のことは、よく覚えていない。気づくと、さっきまで夫婦が笑っていた幸せな空間は、黒く染まり、千切れた肉片でいっぱいだった。目の前で突然木っ端微塵になった美しい嫁を見て旦那さんがどんな顔をしたのか、彼も跡形なくばらばらにしまっていたのでわからなかった。

自分のしたことが信じられず、思わず家の中に入って確認しようとする。そして、自分の失敗に気づく。その家は幸せな夫婦の住む家ではなかった。幸せな一家の住む家であった。子供がいたのだ。高校生くらいの大きな子供が、私を暗く微笑みながら見ていた。私は混乱した。その時、目撃者を殺すべきだと心の隅で思ったことを否定しない。でも、私が殺人を犯したのは一時の気の迷いだったのだ。人間なら誰にでもあり、あつて当然の、仕方のない衝動。あそこで、あの子を殺していたら、私はただの殺戮者だ。人殺しだ。人間でない。屑だ。自らの非を認めて、それを隠すために論理的に、冷静に人を殺す。私はそんな屑にならずに済んだ。私は殺戮者でない。ただ、ちよつと魔が差しただけなのだ。

それでも、私が人を殺したことには違いない。私は警察に通報するよう子供に言った。すると彼は暗い目をして私に言った。

「あんたは、僕の両親を殺した。僕のを奪った。」  
返す言葉はない。その通りだ。だが、それでも、申し開きをしようとする。警察にしようとした、その言い訳を彼に告げようとしたそのとき、

「だから、その分僕にはあんたを所有する資格がある。」  
少年は暗い目で私を見続けていた。私はこの少年が幼子特有の全能感から抜けていないことを感じ取った。考えてみれば、警察に私の罪を測ることなどできまい。私の罪を測ることが出来るのは、その一部始終を見ていたこの子しかない。逆に言えば、この子が納得しさえすれば、私の罪は贖われる。私は心どおりの、心のありようにふさわしい真つ当な人間に戻るのだ。

かくして、私は境練次少年の強欲を達成する尖兵となった。

金を手に入れるべく、拳銃・麻薬・現金を求めて、あちこちのやくざれ者の事務所を襲う。最初の襲撃が一番大きかった。ウェブ上にアップされている程の有名なやくざれ者の屋敷。それを深夜に襲い、目に付くすべての人間を木っ端微塵にした。人間が跡形なく弾ける度に境少年は嬉々たる声を上げ、私はその彼を人でなしと判じる。そうする度私がつまみであるかと認識される。この少年は狂っている。だから、この少年と異なる私は正常なのだ。もうそれだけでいい。この状況でこのような評価基準をもてる私は十分理性的な人間だ。もう、それでいい。

「はむらあ！ひぬな！ぼくの、おくのそひゅうぶつがはつてに、ひぬなんて、ゆるははいぞ、ひっはまあああ」

私の胸に取りすがり、涙をぼろぼろ流しながら、回りきらぬ舌で叫ぶ少年を見る。私の罪はまだ消えないのか。この少年の強欲が尽きることがあるのだろうか、尽きぬのなら、私の罪が消えることもない。ならば、そう、今、この少年に向けられている銃口にすべてを託せばいいのではないだろうか。この少年が死ねば、私の罪を知るものは消える・・・そうか、私はずっと少年の死を望んでいたのか。そうか。この少年が死ねば、私の罪を知るものはいなくなる。ふふ、ふふふふ。そうか、このときを私はずっと待っていたのだ。

「し・・・」

私から最後の言葉を少年に贈ろう。私がつつと怠ってきた告白をし

よう。

「死ね。」

ぶしゅっ

少年の首が飛ぶ。変だな、銃声はしなかったのに。

## 7 「顛末」

吉田恵一を追っていた若衆が通報し事件は発覚した。殺害されたのは留守居の組員17名、先に吉田を連れて戻った組員3名、境、田村、吉田、計23人である。

吉田はリンチを受けて、撲殺されていた。後の調査で、通報前に若衆らが殺害したことがわかった。遺体は実家の家族に引き取られ、懇ろに弔われた。組員殺害の方法は、司法解剖してもわからなかった。殺害方法が、都内で数件起きていた、任侠事務所襲撃事件の被害者と似通っていたため、同一犯の犯行とされた。その後同様の襲撃事件が発生しなかったこともあり、境・田村両名は、事件に深く関わっていると思われたが、二人は身分を示すものを所持しておらず、その素性は結局わからなかった。二人の遺体は無縁仏として葬られた。

「自己中心的なことは7つの大罪の根源と思われる件」完

7 「顛末」(後書き)

いかがですかね。

感想・ご指摘お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6923u/>

---

自己中心的なことは7つの大罪の根源たりうると思われる件

2011年7月11日09時08分発行